

『アーサー・ラザフォード氏の純真なる誓い』

著：名倉和希

ill：逆月酒乱

「両親に会ってこないか」

アーサーにそう言われて、坪内時広は「いよいよそのときが来たのか」と背筋を正した。

アメリカ人のアーサー・ラザフォードと恋人になり、ニューヨークの高級アパートメントで同棲生活を始めて二カ月。近づいてきた夏のバカンスのシーズンに、なにをしたいか、どこで過ごすか、夕食後にコーヒーを飲みながら楽しく話し始めた矢先のことだった。

「両親は今半隠居状態でフロリダ州のオーランドに住んでいる。避暑に行く前にちらっとだけ顔を合わせるのはどうだろう？」

ちらっと、というのはどの程度のことだろうか。お茶するだけとか、カジュアルな食事会とか、フォーマルな食事会とか——いろいろある。アーサーがどんな対面シーンを想像しているのかわからなくて、頷き方が曖昧になった。

「堅苦しく考えなくていい。身構える必要もない。私のセクシャリティを理解して、変わらぬ愛情を向けてくれている人たちだ。それに、もうトキの写真を見せたと言っただろう？ 日本支社に赴任しているあいだに見つけた、最愛の人だと伝えてある」

「……うん、それは以前聞いたけど」

「とてもかわいらしい人だと言ってもらえた。なにも心配はない」

頷いた時広だが、さまざまな心配事が頭に浮かんできて、とてもではないが「楽しみだ」と晴れやかな表情なんてできない。

「実は、私の両親は世界中にいくつか家を所有していてね。家族は——私と兄と妹二人ということだけれど——いつでも使用していいことになっている。ただし、両親のものなので、いつどここの家を利用したいか連絡することが必須となっていて、同伴者がいる場合はどういった関係の人間なのかも知らせなければならないんだ。聞いている？」

「あ、はい」

世界中にいくつか家を所有している、と言っただけで、もう時広の心の許容量を超えてしまい、茫然としてしまった。何度もまばたきを繰り返して、なんとか正気を保ちながらアーサーの話聞き漏らさないように頑張る。

「この夏のバカンスで、私は北欧の家避暑に行くのはどうかと考えている。もちろん君も一緒だ。その前に、一度両親に会ってもらえたら、紹介するのにちょうどいいタイミングだと思う。どうだろう？」

「北欧の家……」

なんだか別世界の話のようで、まったく現実味がない。アーサーの実家は資産家で、かなり裕

福らしい……と察してはいたが、まさかそれほどは思ってもいなかった。あまりにもびっくりしてしまって、時広はなかなか反応できない。

「ああ、もちろん日本に寄って、坪内家の墓参りにも行くつもりだ。バカンスの最初でも最後までどちらでもいい。その際、ダイチに会いたいならば、数日のあいだ、日本に滞在してもいいし。私としては日本の夏は避けたいところだが、トキにとっては故郷だからね」

学生時代からの友人である角野大智に会うことや、墓参りに行くことまで考えてくれていたなんて、ありがたい。夏の暑い盛りを避けるならば、バカンスのあとで、墓参りだけをするつもりでスケジュールを立てたほうがいいだろう。

それよりも、問題はアーサーの両親に会うことだ。にわかには動悸がしてくる。

リビングのソファで並んで座っていた時広の肩を、アーサーが抱き寄せてくれた。

「トキ、なにが心配？」

「その……アーサーは、僕の初めての恋人です」

ついあらたまった口調になった。

「そうだね。そう聞いている」

「だから、恋人のご両親にお会いするのも、初めてなんです」

「そういうことになるだろうね」

「だから、緊張します」

「そう？」

「今から心臓がドキドキして……」

「まだ早いよ」

正直に胸の内を明かしたら、アーサーがクツと笑った。真剣に訴えているのに笑われた。

「僕、冗談で言ったつもりは——」

「わかっている。君が本気だってことは。だってほら」

アーサーの大きな手が時広の左胸に当てられた。Tシャツ一枚越しの接触に、時広はどきりとする。自然と乳首が尖ってきてしまった。ただ胸に手を当てられただけなのに恥ずかしい反応をしてしまい、時広は耳が熱くなってくるのを感じた。

「すごくドキドキしているのがわかる。君は本当にかわいいな」

「アーサー……」

「こちらに来たばかりのときに言ったと思うが、私も『最愛のパートナー』だと恋人を両親に紹介するのは、これが初めてだ。今まで何人もの人と付き合ってきたが、そこまで深く愛し、かつ信頼できる人はいなかった。緊張するのは君だけじゃない」

たしかにそう言われていた。アーサーほどの人が、今まで両親にパートナーを紹介できていなかったなんて驚きだが、二度も口に出して言うのだから真実なのだろう。光栄に思い、堂々と胸を張って会いに行けばいいのかもしれない。

「愛しているよ、トキ」

「アーサー……僕も……」

「……おや？」

アーサーの手がもぞりと動き、なにかを発見したようだ。Tシャツの下で硬くなっている小さな突起を、掌で転がすようにされた。んっ、と声が漏れそうになり、時広は唇を噛む。

「なにかここに隠しているのか？」

「なにも……」

「おかしいな、引っかかりがある」

アーサーの指がそれを摘まむようにした。ピリッと微弱な電流に似た衝撃が走り、時広は息を呑む。

「これはなに？」

「……………乳首……」

「どうして尖っているんだ？ 私は両親に会ってくれと言っただけだ」

「アーサーが、触るから……」

「そういう意図で触ったつもりはない」

「あっ」

ぐりっと指先で押し潰すようにされ、時広は背筋を震わせる。体が芯から熱くなってきてしまい、アーサーの腕に手をかけて止めた。このままだと大切な話を中断してほしくなってしまう。

「あ、あの、アーサー、それで今回はご両親だけ？ お兄さんと妹さんたちは？」

「都合がつかなかったので今回は両親だけだ。兄と妹たちには、いずれ機会をつくって会ってほしいと思っている」

「わかりました」

「ひとつ、トキに伝えておかなければならないことがあるんだが……」

アーサーの声がいつになく硬いように聞こえた。

「私には子供のころに兄弟同然で育った従弟がいる。リチャードといって、母の妹の子だ。叔母は病弱で、母がたびたびリチャードを預かっていた。すこし年は離れているが、本当の弟のように遊んだり本を読んであげたりしたものだ」

一人っ子で育ち、近い親戚もいなかった時広にしたら、うらやましい話だ。

「その叔母は現在、私の両親とともにフロリダに住んでいる」

「お元気なんですね」

「温暖な土地でのんびりしているようだ」

「従弟さんは、いまどこに？」

「リチャードはまだ学生で、カリフォルニア州にあるスタンフォード大学に在籍している。研究が楽しいらしく、ここ数年はあまり会っていないが元気にやっているそうだ」

時広は首を傾げた。アーサーが話の内容にそぐわない、憂いを帯びた表情でいるからだ。

「その従弟さんに、なにか問題でも？」

「問題というか……。私がゲイであることを受け入れてくれていない。リチャードは私が日本から戻ってきたと聞いて、会いたいと連絡をくれているんだが、いまのところ理由をつけて断っている状態だ」

アーサーはカミングアウトしている。そうした反発も覚悟してのことだっただろうが、弟同然

の従弟に認めてもらえないのは辛いだろう。

「私を嫌いになったのなら放っておいてくれればいいのに、なにかと会おうとしてきてね。ここに直接訪ねてくることはないだろうが、そのときは会わずに追い返してくれ」

「追い返すの？」

「なにを言われるかわからない。私は君に不愉快な思いをさせたくないんだ」

納得できないながらも、時広はとりあえず頷いた。アーサーの従弟、リチャードとは、いったいどんな人物なのだろうか。それにしても。

「スタンフォード……従弟さん、優秀なんだ……」

世界的にも有名な大学名なので、一般的な感想を言っただけなのだが、アーサーが片方の眉をくいと上げて目を眇めた。機嫌を損ねたときの顔だ。

「私はハーバードを出ている」

「えっ、そうだったの？」

天はアーサー・ラザフォードという男に二物も三物も与えたらしい。エリート階級に属する人だとわかっていたが、超有名な大学を卒業しているとは知らなかった。とても優秀だったのだろう。

「すごいな」

素直に感嘆したら、アーサーは笑顔になった。

「まあ、日本と違ってこちらでは大学名よりも学部に重きを置く傾向がある。そこでどんなことを学び、どんな研究をしていたのか。そしてどの教授を師事したのか。ただ在籍してただけで、たいしたことを学んでいない学生もいるからね」

「でもアーサーは真面目に勉強をしていた学生だったんだよね？」

「首席を目指していた」

「結果は？」

「もちろん、首席で卒業した」

どうだ、と言わんばかりの表情に、時広はご褒美のようにキスをした。

「学生時代のアーサー……きっと素敵だったんだろうな。会ってみたかった」

アーサーと時広はふたつしか年が違わない。どちらかがどちらかの国に留学していたら、もしかしたら会えていたかもしれない。時広には留学する経済的な余裕などなかったし、ハーバード大学は敷居が高すぎるのであり得ないことだっただろうけれど。

「なにを想像しているんだい？ 学生時代の私なんて、今思うと、鼻持ちならない居丈高で嫌なヤツだったよ。自分が優秀だと自覚していて、教授に目をかけてもらっていることをステイタスだと感じていた」

「まさか、アーサーが嫌なヤツだったなんて、そんなことはないでしょう」

だってこんなに優しく、愛情に満ちた人だ。優秀な人が羨まれるのは、ある程度仕方がないことだし。

「トキは私をずいぶんと買いかぶってくれているようだ。君と一緒にいると、私は上等な人間に生まれ変わったような気がしてくる」

「気がしてくる、なんて……。もともとアーサーは上等な人間でしょう？ 僕にはもったいないくらいなんだから」

「そんなことはない。君こそ、私にはもったいない、純粹で無垢な心を持った人だ」

アーサーのほうこそ、時広を買いかぶっている。いつでもアーサーにキスしてほしくて、抱いてもらいたくて、服の上から心臓のあたりに手を当てられただけで乳首を尖らせてしまうような体になっている。純粹で無垢な人は、そんな反応をしないだろう。

「僕はそんなに無垢じゃないと思うけど」

「そうか？ たとえばどんなところが？」

「えっ……」

言葉に詰まって、時広は目を伏せた。アーサーは時広がなにを考えて「無垢じゃない」と主張しているか察して、わざと言わせようとしているのだ。ときどき意地悪になるアーサーを、時広はちらりと控えめに睨んだ。

「ほら、言ってごらん。どんなところが無垢じゃない？」

「……知っているくせに……」

恨めしげな呟きは、ちゃんとアーサーの耳に届いたらしい。クスクスと笑って、アーサーはぎゅっと抱きしめてきた。そのままアーサーの膝の上に引っ張り上げられ、抱っこされる体勢にされた。この格好は好きだが、ちょっと危険でもある。軽いスキンシップがすぐに濃厚な愛撫に移行し、そのままセックスへと雪崩れこんだ前例が山ほどあるからだ。

バカンスの話があまり進んでいない。まだ半月以上もあるので、そんなに急ぐことでもないけれど――。

「トキ……」

アーサーが時広の首筋に顔を埋めてきた。ちゅ、ちゅ、と柔らかな唇が何度も皮膚を吸ってくる。触れられたそこがふわりと熱を孕み、ゆっくりと広がっていく。

「ボディソープの香りがするね。私が帰宅する前に、シャワーを浴びた？」

「……今日は暑くて、ちょっと外に出たら汗をかいてしまったから……」

「まったく、日本人はきれい好きだな。トキはほとんど体臭がないのに、頻繁にシャワーを浴びるからなにも残らない。私のためを思うなら、シャワーは控えめにしてもらいたい。私はトキの匂いが好きなんだ」

「でも、その、アーサーが帰ってきてすぐに、そういうことになる場合もあるから、きれいにしておいたほうがいいかと気を遣って、僕は……」

「つまり、帰宅した私がすぐにセックスをしたがっても応じることができるように、体をきれいにしておいたということか？」

「あっ……」

そのとおりだ。しかし自分も欲しがっているという事実を、はっきりと指摘されたくはなかった。恥ずかしすぎる。カーッと首まで赤くなった時広を、アーサーが声をたてて笑いながらまた抱きしめてきた。

「君は本当にかわいいな。では、きれいにしたという体をじっくり見せてもらおうかな」

「えっ？」

ぐるん、と視界が回った。あっというまにソファに寝かされ、アーサーが上に覆いかぶさってくる。腰のあたりにずしりと恋人の重みを受け止めさせられ、身動きできない。でもこの重みがいいのだと、時広はうっとり両手をアーサーの背中に回しかけ、ハッとした。

「アーサー、バカンスの話は？」

「続きは明日にしよう」

「んっ、でも、あっ……」

Tシャツの中にアーサーの手が入ってくる。さっき布地の上から弄られた乳首を、今度は直に触られた。指先でくりくりと転がすようにされ、物足りないような、焦れたい快感が胸に広がる。もっと痛いくらいに摘んだり揉んだりしてくれていいのに――。

「あ、んっ、アーサー……」

「なんだい？」

目で訴えてみたが、アーサーは微笑みながら乳首を優しく撫でるばかり。もう何度も抱かれてあらぬところまで見られたり触られたりしているのに、時広はいまだに愛撫をねだることが苦手だった。どうしても、はしたないと思ってしまうのだ。

「トキ、すごくドキドキしているね。今からこんなに緊張していたら、疲れてしまうよ」

平らな胸を鷲掴みにするように揉まれて、時広は「んっ」と鼻から甘い呻きを漏らす。今のドキドキは、両親に会うことを考えたせいじゃない。アーサーにセックスを仕掛けられているからだ。そんなことわかっているだろうに、アーサーは時広の鼓動の激しさを緊張のせいだと言う。

「ほら、リラックスして」

「あんっ」

Tシャツがめくり上げられ、もう片方の乳首にアーサーがキスをしてきた。舌で舐められて、ズキンと股間が痛いほどに熱くなる。けれどやはりソフトな愛撫に終始していて、時広はすぐに物足りなくなった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>